

「農業技術の匠」：^{えんどう} 遠藤 ^{とういち} 藤一 さん（群馬県 館林市）
～ 邑楽館林キュウリ産地における栽培技術の確立 ～



〔遠藤 藤一さん〕

1 技術確立の背景(目的)

群馬県館林市は古くから、キュウリを含めた露地野菜産地として発展してきました。

昭和20年代後半に農業用ビニールが開発され、作型がトンネル栽培へと前進化しました。

そこで、ビニールを有効に活用したさらなる栽培方法の確立と技術の向上、キュウリが端境期となる年末年始の出荷が求められていました。

2 技術概要(技術効果)

(1) 高位安定栽培技術の確立

定植後の温湿度管理を徹底し、化学肥料を控え有機質を中心に施すなど、「締めづくり」と呼ばれる技術を構築し、高品質高収量生産を実践しています。この技術を地域の模範として実践するなど、キュウリ産地の発展に貢献しています。

(2) 竹幌式ビニールハウスによる越冬栽培法の確立

竹を割って骨組みとし、現在のビニールハウスの構造に近いものを自作し、保温性を高めるとともに、加温器具と組み合わせ越冬栽培技術を確立しました。

(3) ウォーターカーテン・地中熱交換方式等の省エネ栽培

ウォーターカーテンや二軸二層カーテン、地中熱交換方式などの技術をいち早く導入して、重油使用量を大幅に削減しました。この技術は現在でも、省エネ対策として応用され活かされています。

遠藤さんは、これらの技術を組み合わせた栽培技術体系を確立しました。

3 技術の地域への活用状況(普及状況)

常に研究心が旺盛で、数々のアイデアと工夫を自らが実践し、有効な技術を仲間達におしみなく公開したことにより、地域の栽培技術が飛躍的に向上しました。

その結果として栽培面積が大幅に拡大するなど、現在の邑楽館林地域の大キュウリ産地が築かれる礎となりました。

また、25年間に渡り研修生を受け入れ、全国各地に優れたキュウリ生産者を輩出するとともに、県内は元より全国各地へ講演と技術指導に奔走し、キュウリ栽培の技術普及に努めています。



〔キュウリハウスの内部〕

※最寄りの普及指導センター { 群馬県館林地区農業指導センター
住所：群馬県館林市成島町1561
TEL：0276-74-2257

<「農業技術の匠」のポイント>

締めづくりによる高位安定栽培技術

- (1) キュウリの「締めづくり」栽培とは？
 キュウリは、水分を控え、生殖成長気味に草勢コントロールすることで、成りくせがつき、果形の良いキュウリを生産することができる。
 このため、通常、温度・湿度・土壌水分・肥料などで樹を生殖成長気味にさせて栽培する。この栽培方法を「締めづくり」という。
 締めづくりを行う時期としては、主枝の摘心前から締めづくりを開始する（キュウリの本葉12～13枚頃から果実肥大）までが重要な時期である。



〔 収穫作業中の遠藤さん 〕

- (2) 具体的な技術ポイント

①肥料

5～6年前までさかのぼって肥料の種類と施肥量を検討している。これは、遠藤さんの経験上、毎年同じ種類の肥料を繰り返し使用していると、だんだん作柄が悪くなっていくこと、施肥量はある限度を超えると、病害虫の多発生や収量減、B品果の発生が増加することからである。

②定植本数

定植本数は坪4～4.5本とする。ベッドには十分灌水し、気温16℃、地温20～22℃で定植する。その後さらに灌水して本葉12～13枚まではのびのびと育てる。その後は灌水をひかえめにし、温度も毎日0.5～1℃くらいずつ下げていき、10日くらいかけて夜間11℃くらいまで下げる。昼間は25℃以上にはならないようにする。

<「締めづくり」と締めづくりをしない栽培の相違点>

	締めづくりをした場合	締めづくりをしない場合
温度	本葉12枚頃まではのびのび、その後は徐々に温度を抑える。 樹の老化が遅くなる。栽培後半までA品率が上がる。 温度設定を適正にすることで無駄な重油の削減。	昼夜温を高く管理すると収穫は早い が樹の老化も早く、収量減、B品の発生が多くなる。
肥料	土壌分析等による適正チッソ投入 ⇒肥料代のコスト低減につながり、生育は良好。	チッソ成分の多投入 ⇒勤や前年と同量の肥料投入による肥料集積、生育不良、病害虫の発生多くなる。 ⇒肥料代増。
水分	控えめにするが、乾かしすぎない適度な管理 湿度を与える時期を見逃さない 根張りが深く広がる。小葉となり受光態勢が良くなる。空中湿度が低くなり、病害の発生が少ない。	どんどん、かん水する 葉と葉の間が長く伸びたひよろつとした軟弱徒長 根はいつでも水をもらえるので、自分から水を求めて根を伸ばさない。葉が大きくなり受光態勢悪化、つるぼけがおこる。 湿度が高くなり、病害の発生が多い。